STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022 ダイジェスト

あいちから世界へ、アートのちからを発信

2010年より3年ごとに開催される「あいち」の国際芸術祭は、5回目を迎えました。国際芸術祭「あいち2022」は、五大陸から総勢100組のアーティストが参加し、現代美術を基軸として舞台芸術やラーニング・プログラムなど、様々なジャンルを横断し開催しました。愛知県出身のコンセプチュアル・アーティストである河原温の作品《I Am Still Alive》シリーズに着想を得たテーマ「STILL ALIVE」(今、を生き抜くアートのちから)のもと、展示やパフォーマンス、オンラインや参加型のイベントなどを、愛知県内の複数の都市のまちなかを舞台として多角的に展開しました。
文化芸術の発展に貢献し、地域のさらなる魅力を周知する――あいちから世界へと最先端の芸術を発信する、国内最大規模の複合型の芸術祭です。

開催目的

- ◉ 新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ◉ 現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ◉ 文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

国際芸術祭「あいち2022」

テーマ	STILL ALIVE　今、を生き抜くアートのちから
会期	2022年7月30日(土) — 10月10日(月・祝)［73日間］
主な会場	愛知芸術文化センター 一宮市 常滑市 有松地区(名古屋市)
芸術監督	片岡真実（森美術館館長）
主催	国際芸術祭「あいち」組織委員会 会長 大林剛郎（株式会社大林組代表取締役会長）

塩田千春《糸をたどって》2022
© VG Bild-Kunst, Bonn, 2023 and Chiharu Shiota
© JASPAR, Tokyo, 2023 and Chiharu Shiota

国際芸術祭「あいち2022」オープニングセレモニーの様子

プレイベント「猩々大行進」

西瓜姉妹（ウォーターメロン・シスターズ）パフォーマンス風景

CONTENTS

●現代美術展

国内外の82組のアーティスト及びグループによる新作を含む作品を展示し、多様な社会を反映した現代美術を紹介しました。愛知県美術館を有する愛知芸術文化センターや、一宮市、常滑市、有松地区（名古屋市）など、県内の広域に展開しました。

愛知芸術文化センター ―― 6
一宮市 ―― 10
常滑市 ―― 12
有松地区（名古屋市） ―― 14

●パフォーミングアーツ ―― 16

国内外の先鋭的な演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品や関連プログラムを、愛知県芸術劇場および愛知芸術文化センター周辺で14演目上演しました。現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートにも注目し、パフォーミングアーツをより横断的に楽しむためのレクチャーやトークなどを企画しました。

●ラーニング ―― 18

「アートは一部の愛好家のためのものではなく、すべての人がそれぞれのやり方で楽しみ享受するもの」という基本的な考え方をコンセプトの核とし、幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施しました。「あいち2022」会期中だけではなく、開幕までの期間を含め、フェーズ毎に目的を設定し、プログラムを構成しました。

●連携事業 ―― 21

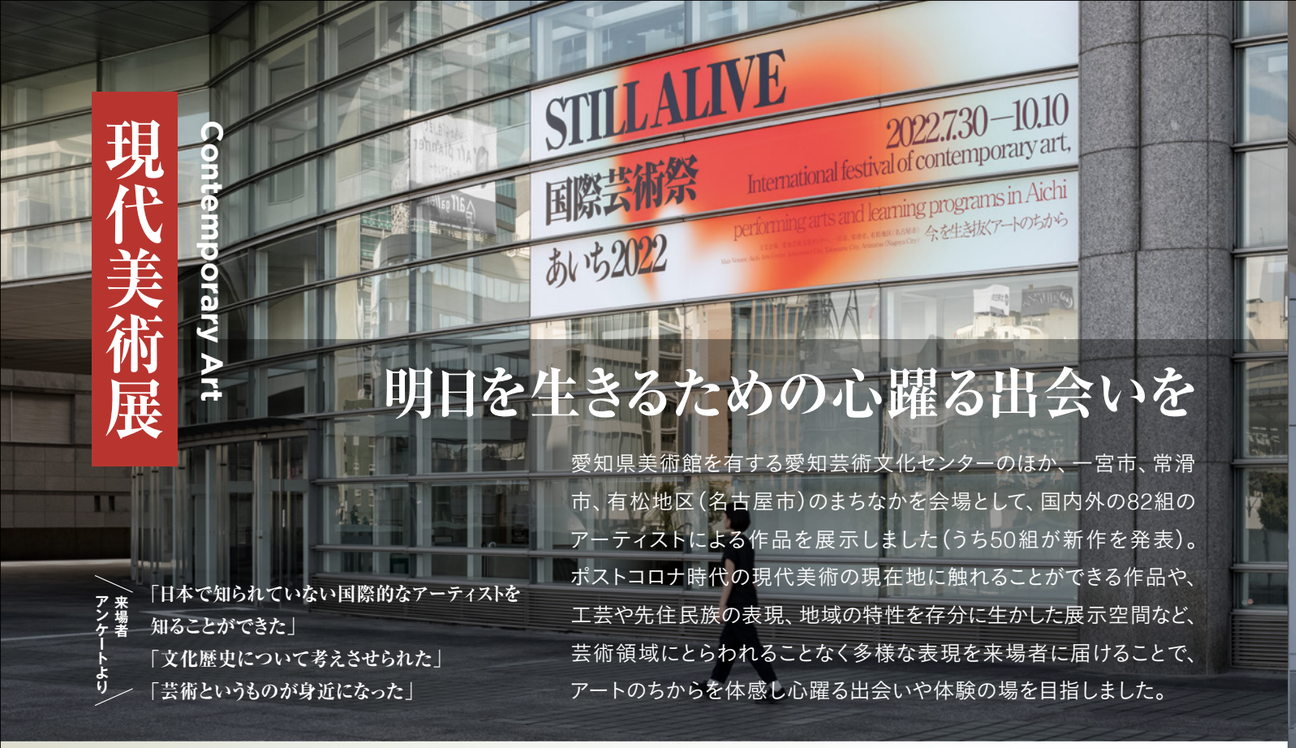
県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開しました。参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内4市（長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市）で開催するなど、愛知県内一帯への芸術祭を契機とした賑わいの広がりを目指しました。

データ ―― 22
ご挨拶 ―― 23

国際芸術祭「あいち2022」ダイジェスト

テキスト：鮫島さやか
デザイン：伊藤敦志（AIRS）
撮　影：ToLoLo Studio［表紙，P2-3, 4（下左除く），P5-14, 15（中央右除く），18, 19（右下除く），20, 21（下左）］
あい撮りカメラ部［P4（下左），P21（下左除く）］
山田憲子［P15（中央右）］
今井隆之［P16, P17（左，右下）］
Shun Sato［P17（右上）］
編　集：阿部慎一郎（びあ）
制作・進行管理：有田泰子／辻歌織／島田文美子（国際芸術祭「あいち」組織委員会）

発　行：国際芸術祭「あいち」組織委員会
名古屋市東区東桜1-13-2　愛知芸術文化センター内
発 行 日：2023年3月10日



現代美術展

Contemporary Art

明日を生きるための心躍る出会いを

愛知県美術館を有する愛知芸術文化センターのほか、一宮市、常滑市、有松地区（名古屋市）のまちなかを会場として、国内外の82組のアーティストによる作品を展示しました（うち50組が新作を発表）。ポストコロナ時代の現代美術の現在地に触れることができる作品や、工芸や先住民族の表現、地域の特性を存分に生かした展示空間など、芸術領域にとらわれることなく多様な表現を来場者に届けることで、アートのちからを体感し心躍る出会いや体験の場を目指しました。

来場者アンケートより

「日本で知られていない国際的なアーティストを知ることができた」
「文化歴史について考えさせられた」
「芸術というものが身近になった」

愛知芸術文化センター

起源から最先端まで、現代を体現するアート

現代美術展とパフォーミングアーツの両分野を横断し、ラーニング・プログラムがアートと来場者を繋ぐ、「あいち2022」のもっとも象徴的な場所です。現代美術展では、愛知県出身で20世紀の美術史に名を刻んだコンセプチュアル・アーティストである河原温を起点に、コンセプチュアル・アートの起源から最先端のアートまで、過去・現在・未来という時間の概念を往来する構成が軸となりました。そこでは、SNSにより短い言葉や記号によるコミュニケーションが広がっている現代社会にも着目し、文字や言葉による表現や詩的な作品も展示しました。

一方で、写真や映像、パフォーマンスなどの表現メディアを通して、身体性をアイデンティティやジェンダーなどの観点から再考するきっかけを来場者に提示しました。また、コロナ禍の今を問う作品のほか、国内外のアーティストによる多様性に富んだ作品とともに、全体のコンセプトである「STILL ALIVE」に即し、生きることの意味、生と死といった根源的なテーマを考えつつ「世界」の多層的な解釈を巡りました。

来場者アンケートより

「時代に合わせたSNSやVRの作品などもありとてもよかった」
「音を使った展示作品にひかれた」
「体験型の展示が多く楽しめた」

10階
マルセル・ブロータース ※
河原 温
奥村 雄樹
ローマン・オンダック
和合 亮一 ※
ロバート・ブリア
ミシェック・マサンヴ
塩見 允枝子
三輪 美津子 ※
リタ・ポンセ・デ・レオン
パブロ・ダヴィラ
ファニー・サニン
アンドレ・コマツ
カズ・オオシロ
カデール・アティア
ジミー・ロベール
ホダー・アフシャール
足立 智美
横野 明日香
大泉 和文

※ 8階にも展示

8階
ディムート・シュトレーベ
ケイト・クーパー
笹本 晃
ディードリック・ブラッケンズ
百瀬 文
リリアナ・アングロ・コルテス
モハンマド・サーミ
潘逸舟（ハン・イシュ）
シュエ ウッ モン
（チー チー ターとのコラボレーション）
クラウディア・デル・リオ
小寺 良和
ミルク倉庫+ココナッツ
荒川 修作+マドリン・ギンズ
メアリー・ダバラニー
バイロン・キム
アブドゥライ・コナテ
岸本 清子
ヤコバス・カポーン
ローリー・アンダーソン&黄心健
（ホアン・シンチェン）
渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）

地下2階
小野澤 峻
縄（愛知県芸チーム initiated by 奈良美智）

ジミー・ロベール《反復》2010

リタ・ポンセ・デ・レオン《魂は夢をみている　生きる価値とは何かについての詩人ヤスキン・メルチーと新納新之助と友人たちの言葉》2022

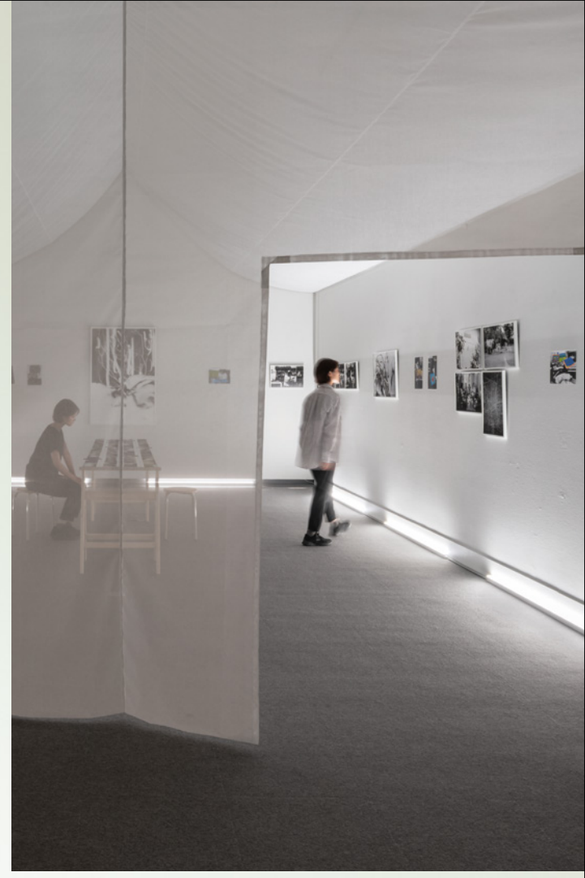
和合亮一《詩の礫 2022》2011-2022

アンドレ・コマツ《失語症》2022／ファニー・サニン

百瀬 文《Jokanaan》2019　愛知県美術館蔵

和合亮一／ロバート・ブリア／ミシェック・マサンヴ

アブドゥライ・コナテ



シュエ ウッ モン（チー チー ターとのコラボレーション）《雑音と曇りと私たち》
2020-2022

リリアナ・アングロ・コルテス

クラウディア・デル・リオ《生きる工夫》2022

一宮市

地域の特性と歴史にリンクしたダイナミックな展示

愛知県の北西部に位置する人口約38万人の尾張地方の中核市・一宮市は、江戸時代より綿織物の生産が盛んとなり、絹綿交織物の生産を経て、毛織物（ウール）生産へと転換、「織物のまち一宮」として発展してきた経緯があります。「あいち2022」では、その歴史と文化に着目し、地域の魅力を引き出すような作品を市内各地に展示しました。尾張国の「一宮」である真清田神社へ向かう参道沿いから、神社の裏手にある旧看護専門学校や旧スケート場にかけて作品を配置し、祈り、誕生、死、ケアなどについて来場者が思いを馳せ、「STILL ALIVE」について考える場を創出しました。

また、旧毛織物工場や織機・撚糸機などを収蔵する資料館では、繊維業の歴史を意識させる作品を展示、愛知県内唯一の丹下健三建築である墨会館では建築的な特性に応答した作品を設置するなど、地域性を活かしてダイナミックに展開しました。

市役所のロビーにインスタレーション作品を構成し、公衆トイレの壁面をグラフィティで覆うなど、来場者はもちろん、地域住民が日常生活のなかでアートに触れる機会を提供しました。

来場者アンケートより

「一宮会場はサイトスペシフィックな作品が多く楽しめた」
「地域の中で元々ある魅力と作品とが組み合わさっていて大変いいと思う」
「展示会場を活かした作品づくり、展示の仕方がとても個性的で楽しませていただいた」

オリナス一宮
奈良 美智
つむぎロード（公衆トイレ南側壁面）／大宮公園
バリー・マッギー
一宮市役所
眞田 岳彦
旧一宮市立中央看護専門学校
近藤 亜樹
小杉 大介
西瓜姉妹（ウォーターメロン・シスターズ）
升山 和明
ケイリーン・ウイスキー
ローター・バウムガルテン
ジャッキー・カルティ
許家維（シュウ・ジャウェイ）
石黒 健一
ニャカロ・マレケ
旧一宮市スケート場
アンネ・イムホフ
豊島記念資料館
遠藤 薫
国島株式会社
曹斐（ツァオ・フェイ）
のこぎり二／旧一宮市立中央看護専門学校
塩田 千春
尾西生涯学習センター墨会館
レオノール・アントゥネス
迎 英里子

塩田千春《糸をたどって》2022
© VG Bild-Kunst, Bonn, 2023 and Chiharu Shiota
© JASPAR, Tokyo, 2023 and Chiharu Shiota

バリー・マッギー《無題（つむぎロード）》2022

アンネ・イムホフ《道化師》2022

奈良美智

迎英里子《approach 13.0》2022

眞田岳彦、あいちNAUプロジェクト《白維》2022

常滑市

焼き物のまちを歩きながらアートに触れる

常滑市は日本六古窯の一つであり、急須、土管、タイルなど、時代に合わせて様々な焼き物を生産し、海に面していることから海運業も発展した地域です。昭和初期の風情を随所に残す「やきもの散歩道」を巡り、旧家・廻船問屋瀧田家、常滑の焼き物の歴史を体験できるINAXライブミュージアムに続くエリアに作品を点在させ、来場者が常滑のまちを散歩しながらアートに触れることができる動線を生み出しました。

大地や火、水、空気など、焼き物に欠かせない要素を活用した作品を配置し、生命を育む根源的な要素から芸術祭のテーマ「STILL ALIVE」を考える場づくりを目指しました。

また、常滑の産業史など政治経済のあり方を掘り下げた新作も展示したほか、人々の移動や移住の背景を語る作品などかつて海運の要所でもあったその歴史に呼応しました。いまだに往時の名残を感じられる製陶所など、歴史的建造物を舞台に来場者の五感に訴えるような展示空間が実現しました。そうして常滑の歴史や物語を紐解くことで、アートのちからと常滑のまちの魅力に迫りました。

来場者アンケートより

「常滑のまちを歩きながらいろいろと見られるのは嬉しい」
「古い建物も残っていて中に入れるのもありがたい」
「常滑、一宮、有松のような、まちなか会場的なものを積極的に続けてほしい」

旧丸利陶管
デルシー・モレロス
ティエリー・ウッス
グレンダ・レオン
服部 文祥+石川 竜一
シアスター・ゲイツ

廻船問屋　瀧田家
トゥアン・アンドリュー・グエン
ニーカウ・ヘンディン

常々（つねづね）
田村 友一郎

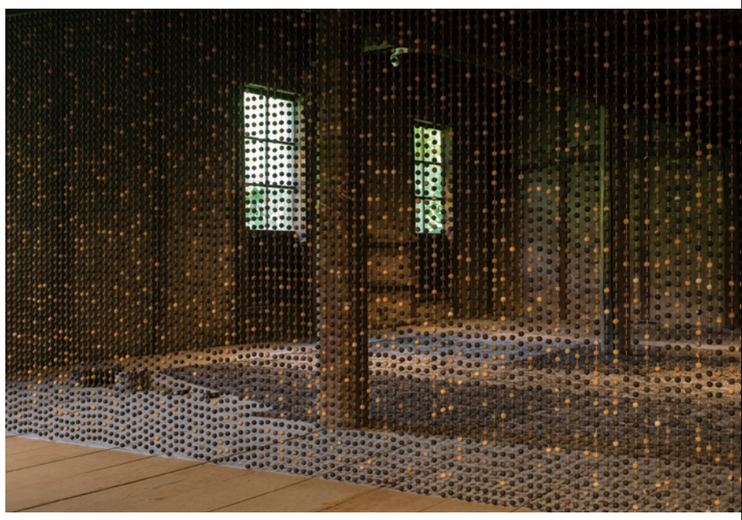
旧青木製陶所
黒田 大スケ
フロレンシア・サディール

旧急須店舗・旧鮮魚店
尾花 賢一

INAXライブミュージアム
鯉江 良二

デルシー・モレロス《祈り、地平線、常滑》2022

シアスター・ゲイツ「ザ・リスニング・ハウス」2022


フロレンシア・サディール《泥の雨》2021

尾花賢一《イチジクの小屋》2022

黒田大スケ《とこなめの笛》2022

黒田大スケ・ワークショップ「ふえフェス」

有松地区（名古屋市）

アートを巡り、伝統とまちの魅力を知る

尾張藩が東海道の鳴海宿と池鯉鮒（ちりゅう）宿の間に開いたまち、有松では400年以上にわたって有松・鳴海絞りの伝統が継承されてきました。「あいち2022」では、江戸と京都を繋いだ東海道沿いの町並み保存地区を中心に作品を配置しました。有松で継承されてきた伝統的な手仕事に対して、世界各地で受け継がれる手工芸、コミュニティの繋がり、先住民文化などに着目した作品を展示しました。国の重要伝統的建造物群保存地区であり、日本遺産にも選定された歴史的な風景には、祝祭的なリボン状の絵画を伝統家屋の軒下などの屋外に設置し、通行中の地域住民や芸術祭を知らない人たちも気軽にアートのちからに触れることができる場を創出しました。
また、伝統的な日本家屋の建築空間に応答する作品を通して、歴史、記憶、蓄積、移動、政治などに関わる様々な物語を紐解くことを試みました。

複数箇所
ミット・ジャイイン
竹田家住宅
プリンツ・ゴラーム
竹田家茶室 栽松庵
ガブリエル・オロスコ
川村家住宅蔵
タニヤ・ルキン・リンクレイター
岡家住宅
ユキ・キハラ
AKI INOMATA
株式会社張正
イワニ・スケース
旧加藤呉服店
イー・イラン
宮田 明日鹿

来場者アンケートより

「地域の特有の文化に根差したインスタレーション等があると、その地域の芸術祭の魅力が増すように思う」
「今回有松地区に初めて訪れたが古いまちなみが残っていて驚いた」
「毎回、初めて行く愛知県内のエリアで会場を設けているのが良い。
今回も、有松地区という、歴史あるまちなみが名古屋市内にあるという発見をすることができた」
「作品の良さもさることながら、まち歩きが楽しかった」

ミット・ジャイイン《ピープルズ・ウォール（人々の壁）2022》2022

AKI INOMATA《彼女に布をわたしてみる》2022

イー・イラン《ティカ・レーベン（マットのリボン）》2020

宮田明日鹿「有松手芸部」2022

ユキ・キハラ《サーモアのうた - Fanua（大地）》2021

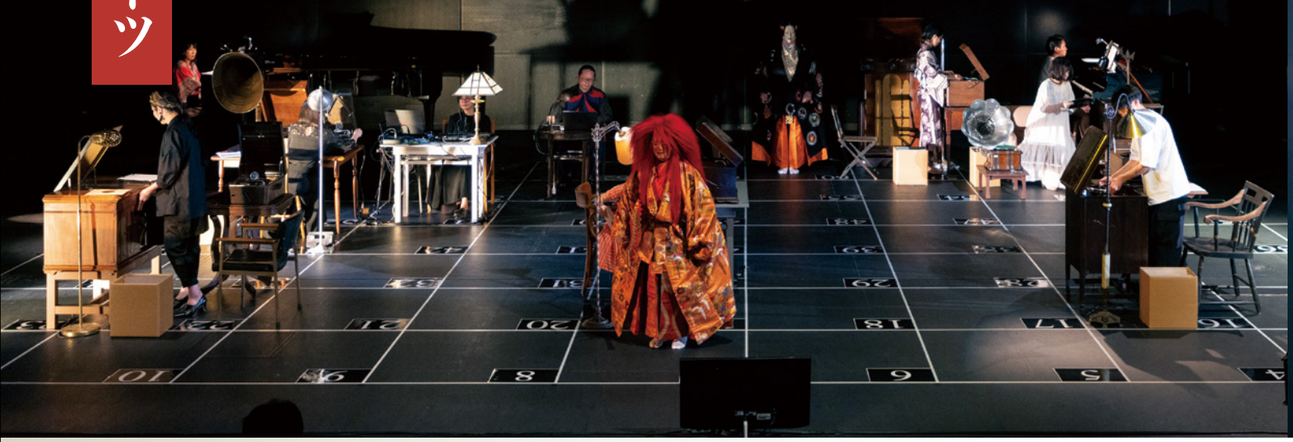
イワニ・スケース《オーフォード・ネス》2022

パフォーミングアーツ

Performing Arts

舞台や最新技術で体感するアート

演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品や関連プログラムを、愛知県芸術劇場および愛知芸術文化センター周辺で14演目上演しました。テーマ「STILL ALIVE」への応答として、多様なパフォーマンスが花開いた1960年代以降の前衛芸術にも注目し、その再演や再解釈を行うことで歴史をたどり現在を照らす作品を集中的に上演しました。加えて、長期化するコロナ禍を経て、身体と生、そのケアをめぐる新たな倫理を問いかける作品にもフォーカスしました。そこではVRなど最新のテクノロジーを活用し、パフォーマンスの領域を拡張する新たな挑戦を試みました。また、パフォーミングアーツをより横断的に楽しむためのレクチャーやトークをオンライン配信しました。

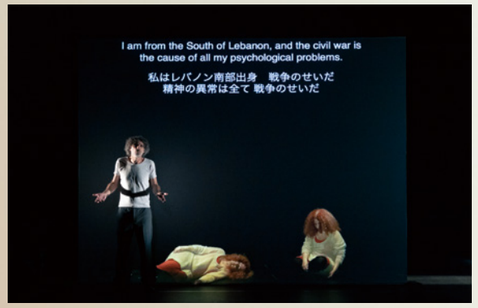


ジョン・ケージ『ユーロペラ3&4』

中村蓉『ジゼル』

上：アピチャッポン・ウィーラセタクン『太陽との対話（VR）』
下：足立智美『音響詩ソロ・パフォーマンス』

今井智景『シネクドキズム3 by music, photography and visual art』



ラビア・ムルエ『表象なんかこわくない』

トラジャル・ハレル『シスター あるいは 彼が体を埋めた — Sister or He Buried the Body』

トラジャル・ハレル
ダンス **『シスター　あるいは　彼が体を埋めた — Sister or He Buried the Body』** 7月30日（土）13:00、7月31日（日）18:00　愛知県芸術劇場 小ホール
ダンス **『ダンサー・オブ・ザ・イヤー』** 7月30日（土）17:00、7月31日（日）13:00　愛知県芸術劇場 小ホール

スティーヴ・ライヒ
音楽 **『スティーヴ・ライヒ～スペシャル・コンサート』**
7月30日（土）19:00、7月31日（日）15:00　名古屋市芸術創造センター

バック・トゥ・バック・シアター
映画 **『ODDLANDS』** 7月30日（土）11:00 / 12:00 / 13:00 / 14:00 / 15:00 / 16:00 / 17:00　愛知県芸術劇場 大リハーサル室
映画 **『ODDLANDS』/『SHADOW』** 10月8日（土）17:30 / 19:30、10月9日（日）17:30、10月10日（月・祝）11:30　伏見ミリオン座

塩見 允枝子
音楽 パフォーマンス **塩見 允枝子パフォーマンス作品**
『～音と詞と行為の時空～』「詞と概念を演奏する」
8月6日（土）10:30 / 15:00　愛知県芸術劇場 大リハーサル室
音楽 パフォーマンス **塩見 允枝子パフォーマンス作品**
『～音と詞と行為の時空～』「ピアノ×パフォーマンス」
8月6日（土）12:00 / 16:30　愛知県芸術劇場 大リハーサル室

足立 智美
音楽 **『音響詩ソロ・パフォーマンス』** 8月7日（日）14:00 / 18:00
愛知県芸術劇場 大リハーサル室

ジョン・ケージ
音楽 **『ユーロペラ3&4』**（演出：足立 智美）8月13日（土）17:00、8月14日（日）15:00　愛知県芸術劇場 小ホール

中村 蓉
ダンス **『ジゼル』** 9月17日（土）18:30、9月18日（日）15:00、9月19日（月・祝）15:00　愛知県芸術劇場 小ホール

今井 智景
音楽 **『シネクドキズム3 by music, photography and visual art』**
9月30日（金）19:30、10月1日（土）14:00　愛知県芸術劇場 小ホール

ラビア・ムルエ
演劇 **『表象なんかこわくない』**
10月2日（日）17:00、10月4日（火）19:00　愛知県芸術劇場 小ホール

アピチャッポン・ウィーラセタクン
VRパフォーマンス **『太陽との対話（VR）』**
10月4日（火）－10日（月・祝）　愛知県芸術劇場 大リハーサル室

百瀬 文
体験型パフォーマンス **『クローラー』**
10月6日（木）－10日（月・祝）　愛知県芸術劇場 小ホール

アートを学び、自分と出会う

Learning

ラーニング

「アートは一部の愛好家のためのものではなく、すべての人がそれぞれのやり方で楽しみ享受するもの」という考え方をコンセプトの核とし、幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施しました。「あいち2022」開幕前より、リサーチ、ガイドツアー、レクチャー、スクール・プログラム、ボランティア・プログラムなど、多種多様な角度からアートに触れることができるプログラムに取り組み、世界についての認識を広げ、自分自身を見つめ直す学びの場を提供しました。

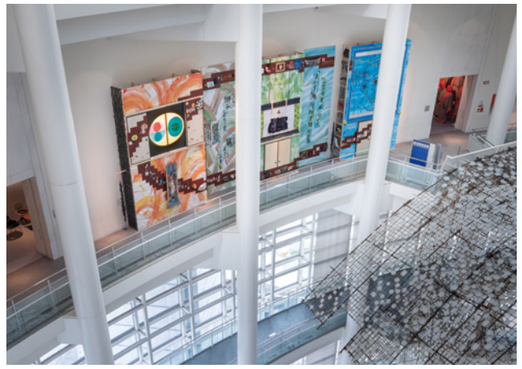
うらあやか＋小山友也《勝手に測る、挟まる、抜け出す》2022

Åbäke&LPPL《Fugu Gakko（河豚学校）》2022

リサーチ

「愛知」にまつわる様々なテーマについてリサーチするプロジェクトです。開幕前より、アーティストが公募による参加者と共に自由な形式で実施し、その結果を会期中に展示、ワークショップ等を通して発展させました。

Åbäke & LPPL
AHA!［Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ］
井上 唯
眞島 竜男
徳重 道朗
山本高之と猩々コレクティブ
うら あやか+小山 友也



眞島竜男《MA・RU・GO・TO あいち feat. 三英傑》2022

井上唯《“ほの国”を知るためのプロジェクト》2021-2022

ベビーカーツアーの様子　ローマン・オンダック《イベント・ホライズン》2016

学校向け団体鑑賞プログラムの様子
グレンダ・レオン《月に耳をかたむける》2020,《雨に耳をかたむける（愛知）》2022

学校向け団体鑑賞プログラムの様子
眞田岳彦、あいちNAUプロジェクト《白維》2022

スクール・プログラム

教職員や美術教育関係者へ向け、今後の教育活動の参考としてもらうことを目的に、「サマー・スクール」を実施。会期中には、愛知芸術文化センターだけではなく、まちなか会場においても学校向け団体鑑賞プログラムを開催し、多くの児童・生徒が参加しました。

ガイドツアー

キュレーターやボランティアなどが案内するツアー、複数の言語によるツアー、赤ちゃんとそのご家族、視覚や聴覚に障がいのある方など様々な人々を対象にしたツアーを実施し、作品の見方や理解、鑑賞体験を広げ、深めました。

レクチャー

「愛知」や「美術史」、「芸術祭」について考えるレクチャーシリーズを2021年よりオンラインで実施しました。会期中には先進的なラーニング・プログラムについて学ぶレクチャーや、参加アーティストやキュレーターらによるトークやディスカッションなどのイベントを開催しました。

ボランティア・プログラム

研修を通じて「対話型鑑賞」の手法を学んだボランティアスタッフが、来場者と対話的な鑑賞の機会を創出するべく各開催地で活動しました。また、「会場運営」や「ガイドツアー」など様々な活動を通して芸術祭を支えました。

ボランティア研修の様子

オンライン展開

国際芸術祭「あいち2022」に関する映像やオンラインでのプログラムなどを掲載する、「ラーニング・アーカイブ」を公式Webサイトで公開しました。
ラーニング・プログラムとして2021年から実施してきた片岡真実芸術監督による動画シリーズや、「愛知」や「美術史」、「芸術祭」について考えるレクチャーシリーズに加え、パフォーミングアーツ公演に関するトーク、現代美術展参加アーティストやキュレーターによるトークやディスカッションなど、「あいち2022」オリジナル企画をデジタルコンテンツとしてまとめました。

「ローリー・アンダーソン アーティストトーク」

「STILL ALIVE キュレトリアル・ラウンドテーブル」

片岡真実『監督と学ぶ』 第6回「土でつながる、広がる」

連携事業
Collaborative Programs

派生する繋がり、拡張するアートのちから

芸術祭を契機として愛知県内一帯に賑わいが広がるように、県内の市町村や芸術大学などとの連携事業に取り組みました。「あいち2022」現代美術展の参加アーティストによる短期間の巡回展示や、商店街で関連イベントなどを実施しました。また、企画公募で選考した7組の地元文化芸術団体との共催による舞台公演や、愛知県内で同時期に開催される文化芸術事業と相互に広報展開を図る連携企画事業、パートナーシップ事業などを行いました。

「あいち2022」ポップ・アップ! 半田市でのガイドツアーの様子

ワークショップwithアーティスト
黒田大スケ「心霊わしづかみ!幽霊写真術」

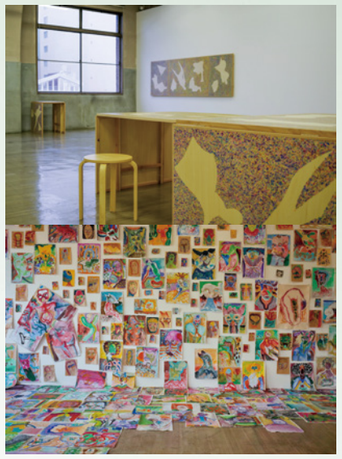
「あいち2022」ポップ・アップ!

「あいち2022」現代美術展参加アーティスト82組のうち11組の作品が長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市の文化施設などを巡った移動型展覧会。「STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから」のエッセンスが感じられる作品展示に加え、アーティストによるワークショップやガイドツアーなどを行いました。

円頓寺商店街・円頓寺本町商店街連携事業

名古屋駅と名古屋城のほぼ中間に位置し、下町情緒を残す「円頓寺商店街」と「円頓寺本町商店街」のアーケードにて、「あいち2022」の有松地区(名古屋市)会場に出展したミット・ジャイインの作品を配置したほか、関連イベントを実施しました。

音楽イベント「STILLING ALIVE MUSIC CLUB」
(円頓寺商店街・円頓寺本町商店街 連携事業)の様子


上:杉谷遊人「語源は話す、いくつかの方法」
下:大野未来「片隅で0になる」

芸術大学連携プロジェクト

国際芸術祭「あいち」組織委員会が運営するアートセンターである「アートラボあいち」と地元芸術大学(愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学)がプロジェクトチームを組み、各大学を卒業・修了後10年以内の今後の活躍が期待されるアーティストを1名ずつ選出し、4つの個展を連続で開催しました。

数字で見る「あいち2022」

アーティスト数
100組

参加国
32の国と地域

まちなか会場の展示場所数
一宮市10／常滑市6／
有松地区（名古屋市）12
28ヶ所

展示面積
14,781㎡
愛知芸術文化センター7,490㎡／一宮市4,965㎡／
常滑市1,657㎡／有松地区（名古屋市）669㎡

ボランティア登録者数
983人

総来場者数
487,834人

1日の最多来場者数 **25,475人** ※10月9日
平日の平均来場者数 **3,944人**
土日祝の平均来場者数 **11,632人**

学校向け団体鑑賞プログラム参加校数 **24校**
参加者数 1,716人

企業・団体・個人の支援件数 **184件**

経済波及効果
約73億円

パブリシティ効果
約10億円

WEB

会期中の公式Webサイトアクセス数
1,450,460PV
478,974セッション

SNS

Twitter
会期中のインプレッション数
1,245,765
フォロワー数（12月28日時点）
3,743人

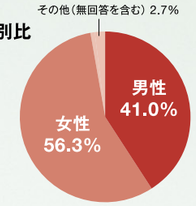
Facebook
会期中のページリーチ数
435,468
フォロワー数（12月28日時点）
1,468人

Instagram
会期中のリーチ数
343,166
フォロワー数（12月28日時点）
5,771人

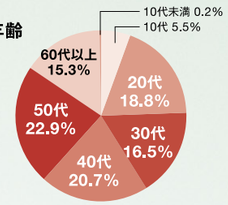
YouTube
会期中の視聴回数
14,054
チャンネル登録者数
601人

アンケート結果

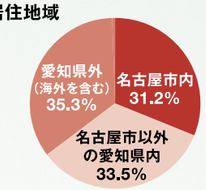
性別比



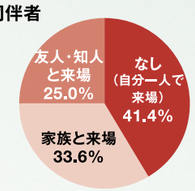
年齢



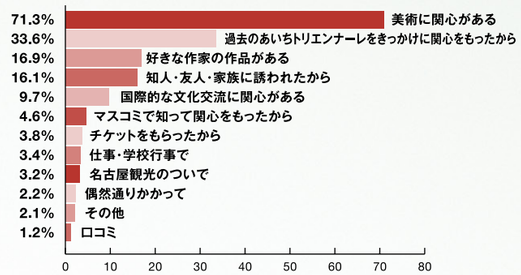
居住地域



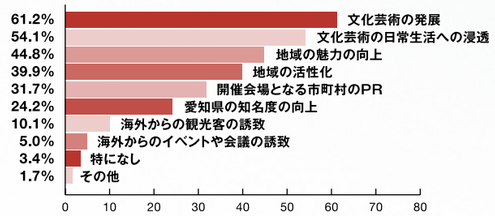
同伴者



Q. 国際芸術祭「あいち2022」に来た理由を教えてください。（複数回答可）



Q. 国際芸術祭にはどんな効果があると思いますか。（複数回答可）



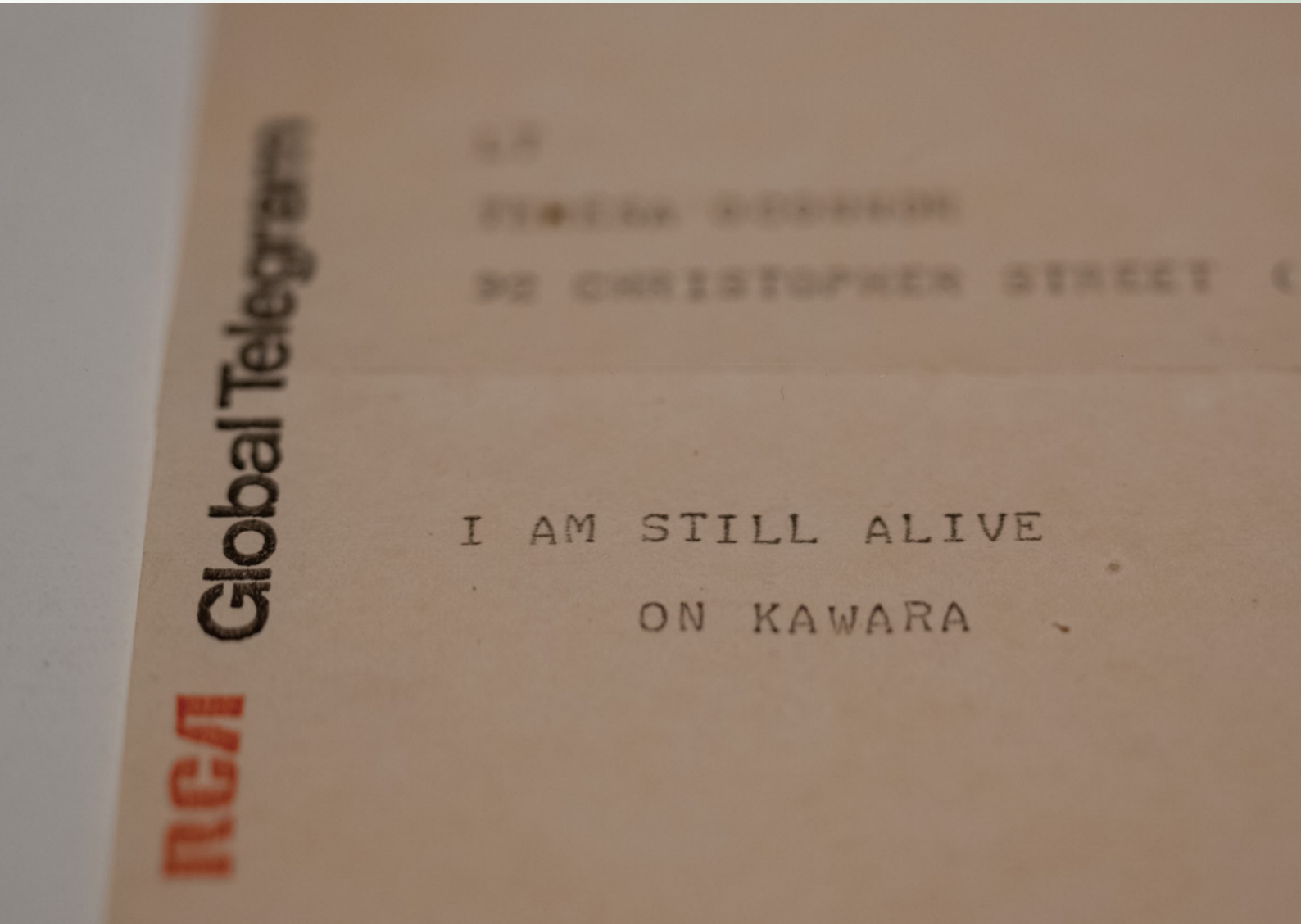
「STILL ALIVE」を通して問い掛けた生きる意味、アートのちから

国際芸術祭「あいち2022」は、コロナ禍に始まり、入国制限大幅緩和の直前まで、不確実性の只中で準備・開催された国際展でした。そのなかで、芸術祭のテーマ「STILL ALIVE」を通して問い掛けた、生きることの根源的な意味、今を生き抜くための芸術や芸術祭のちから。キュレーターや世界各地のキュレトリアル・アドバイザーがこのテーマに応答し、そこから派生して選ばれた100名（組）のアーティストがそれぞれの立ち位置から応答を見せ、48万人の観客のみなさんがそれぞれに感受してくださいました。

愛知芸術文化センターという美術館・劇場空間での展示や公演に対し、一宮市、常滑市、有松地区（名古屋市）の会場では、街の歴史、産業史、伝統文化が浸透する空間の磁力によって作品の意味が幾重にも深まりました。国際性か地域性かの二項対立に陥るのではなく、その双方を妥協無く共存させられるのか。愛知と世界との対話からじつにさまざまな価値観相互の繋がりを実感できるのか。現代美術、パフォーミング・アーツ、工芸、ラーニングなどの領域をそれぞれ深めながら、そこに通底する芸術の本質に至ることができるのか。過激さや派手さによる衝撃ではなく、それぞれの作品や作家に真摯に向き合うことで、想像力を介して他者への共感がもたらされるのか。こうした試みがどのような結果に繋がったのかは、国際芸術祭「あいち2022」に関わった、そして鑑賞したすべての方々のこれからの時間に明らかになることでしょう。今回の体験がみなさんの今後の人生にポジティブに活かされる、まさに「STILL ALIVE」なものとなれば、これにまさる喜びはありません。

※片岡真実芸術監督による閉幕に際しての挨拶より。

片岡 真実
Kataoka Mami
［森美術館館長］
Photo: Ito Akinori

STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

河原温
テレサ・オコナーに宛てた電報、1974年10月17日
《I Am Still Alive》（1970-2000）より
© One Million Years Foundation
撮影：ToLoLo studio